

| | |
|------------------|---|
| Title | 高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史 |
| Sub Title | Professor Seiichiro Takahashi's studies in the pre-history of utility theory |
| Author | 丸山, 徹 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1985 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.78, No.4 (1985. 10) ,p.395(79)- 415(99) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19851001-0079 |
| Abstract | |
| Notes | 小特集 : レオン・ワルラス |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19851001-0079 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史

丸 山 徹

序

1870年代に始まるいわゆる「限界革命」の最も重要な意義は、経済均衡の思考方法を経済分析の基本的枠組として定着せしめたところにそれを求めることができるであろう。

また限界革命の進展過程で、価値・価格の決定に際して、主観的要因＝効用が果たす重要な役割に、強いアクセントがおかれる傾向のあったことにも注意しておかねばならない。ここにパレート＝フィッシャー＝スルーツキーを経由してヒックスにいたる、消費者行動の純粋理論が本格的な展開を始動したのであった。

さて私は拙著〔25〕の中で、主観的価値学説の発生をさぐり、それがさまざまな支流をつくりながら、ヨーロッパの思想界を灌漑していった景観をデッサンし、併せてジェヴォンズ、メンガー、そしてワルラス、および彼らに連なる学問的伝統の異質性についても論及した。この経済学史のひとこまを描き出すにあたって、私が最も参考にし、また負うところの大きかったものは、故高橋誠一郎教授の広汎重厚な経済学史研究であったと言わねばならない。

価値・価格の説明にあたり、主観的要素を重んずる傾向は決して限界革命に始まったのではなく、実はその源を古代ギリシャの先哲の思想に発し、それはイタリアの中世・近世を貫いて、悠々2000年の思想的伝統を育みながら、限界革命へと流れ着くのであった。高橋教授の、実に様々な領域にわたる学史研究を総合すると、主観的価値学説の展開過程の相貌が如実に浮かび上がるのであって、限界革命を、単にイギリス古典学派の客観的価値学説に対する主観的価値学説の勝利としてのみ位置づけた浅薄な学史研究は、全くその光彩を失わねばならないのである。

本稿は、当該の問題に関する高橋教授の研究からわれわれが学び取り得る学史的着眼点を摘記し、また依然として残された問題点を明示することを目標とするものである。以下、大略次の四つの主題に即して、検討を進めることとした。

第一に、効用思想の源流とみなすことのできる古代ギリシャ・ローマの経済思想に関する研究。

第二に、中世におけるイタリアの効用思想とその社会・経済的背景に関する研究。

第三に、近世の重商主義期におけるイタリアの効用思想、およびそれがフランスへと移入される際に、その結接点として不可欠の役割を演じたガリアーニ、ならびにフランスにおける彼の追随者たるチュルゴー、コンディヤックの研究。

第四に、イギリスと独・奥における効用思想の展開過程の研究。

§ 1 効用思想と正価思想の起源について

高橋 [44] (pp.1275—1277), [45] (pp.2053—2055) は主観的価値学説の系譜を、その源流まで辿って、プラトン=アリストテレスの経済思想に到達した。すなわちまず、プラトンは『国家』の中で、国家の起源を欲望充足のための需要と結びつけて理解した。そしてプラトンの弟子アリストテレスもまた、師に従い、人間の欲望によって導かれる需要こそ、あらゆる商取引を接合し、社会を結合する絆であるとみなしたのであるが、しかしアリストテレスはさらに進んで、交換の場に成立する価値現象にも着目した(『ニコマコス倫理学』第5巻)。アリストテレスの所論はいろいろに解釈する余地があるが、概ね次のように理解するのが自然と思われる。つまりふたつの財の一定量が相互に交換されるためには、その両者を通約し、なんらかの同等性を保証する尺度がなければならぬ。その尺度とは、各主体が相手に喜んで支払おうとする貨幣額に体现される、人間の欲望強度にほかならないと考えられているのである。これはすなわち、価格の発生する背後に、その前提として、効用あるいは使用価値の果たす本質的な役割を認めようとするものであろう。しかし他方、効用がどのようにして価格に転化するかという点の分析は、これを放棄したものと見なければならぬ。いずれにせよ『ニコマコス倫理学』第5巻におけるこの所論は、その後のあらゆる価値理論がそこから流れ出る最大の水源となったのである。

アリストテレスの価値学説に関する他の文献としては、フィンレイ [12], ゴードン [13] [14], ラングホルム [21], ロウリー [22] [23] [24], シュピーゲル [35] (Chap. 2) などがある。

古代ローマにおいては、きわめて個人主義的な自然生活を唱導するストア哲学の影響が濃厚であったために、財の価格は全く交換当事者の自由な意志によって定まるべきものとみなされた。すなわちローマにおいては、「ものの価値はその売られ得るところのものである」という思想が支配的であったことを、高橋 [45] (pp. 2056—2057) は正確に強調・指摘している。たとえば「十二表法」(紀元前5世紀)では、価格を市場の動揺に委ね、それをそのままは認しようとする傾向が顕著であった。またより時代が下って、2世紀前半にいたってもなお、法曹ポンポニウスなどは「売買に際し、他を欺瞞せんと試むるは、契約当事者に対して当然許容せらるるところである」と明言してはばからなかったのであった。

しかしやがて、ローマ帝政の衰退期にさしかかる3世紀末葉から、物価騰貴の悪影響の回避、不当利益の抑制、あるいは経済衰退期における生産階級の安定確保などを目的として、ついに301年、ディオクレティアヌス帝は勅令をもって、慣習的な生産費に基づく「正価」あるいは「真価」の決定を企図したのであった。公定価格の制定は、より古い時代にもその例をみいだすことができるのであるが、301年の正価制定はそれ以前のものに比べて格段に徹底したものであった。

さて一方、帝政の黄金時代に西南アジアにおこったキリスト教は、社会不安と人心の動揺の著しい帝政末期のローマに次第に深く浸透してくる。高橋〔45〕(pp. 2064—2067)は、このころ北アフリカのヒッポに現われた聖アウグスチヌスの思想の中に中世的正価論の基礎を見出している。これは「スコラの価値理論はその起源を『神の国』における聖アウグスチヌスの所論に得ている」と論じたデ・ルーヴァー〔8〕(p. 124)の見解とも符合する。高橋はアウグスチヌス『三位一体論』の、

「余は、写本の購入を求められたるとき、その売手がその正しき価値を知らざりしをみて、彼にその予期せざりし公正の価格を与えたる人を知る」

という一節に着目し、ここには正価思想が明らかに認められるものの、その水準を定める規準については不明のままとどめおかれていることを指摘している。しかし実は、アウグスチヌスの『神の国』(XI, 16)をみると、彼が企図した正価の水準がきわめて主観的な色彩の強いものであったことが判明する。つまり彼は、人間はものを評価するのに自然的な秩序の等級によってこれをおこなうのではなく、むしろ人間の欲求をみたす能力によると述べているからである。

以後、中世の思想界においては、価値・価格の客観的説明と、そのあるべき値としての正価の観念とがしばしば混同されながら論じられてゆくのであるが、価値の決定要因として人間の欲望・効用を重視する点において、それは基本的にアリストテレス＝アウグスチヌスの伝統の上に立脚するものといえることができるのである。

西ローマ帝国滅亡(476年)後の約6世紀間は、まことにヨーロッパは、知的暗黒の時代であったと言わねばなるまい。ゲルマン民族の大移動やサラセンの進攻など、蛮民の侵略によって生じた混乱と、僧侶の全精力が神学上の問題のみに注がれたため、学術の面では殆ど見るに値するものが生み出されなかった。中世における学問の世界に漸く活気が甦ってきたのは、10世紀を過ぎて、キリスト教の支配下に古代哲学を再生させ、しかもまた両者の間に矛盾がある場合には哲学を神学に適応せしめようとするスコラ哲学者の活躍する時代に立ち到ってからのことであった。

§ 2 中世の正価思想

中世における商品経済の発達とともに、正価思想は再び復活する。中世における価値・価格学説

は、この正価論との関連において検討されなければならない。

〔1〕 価値学説の主観的性格

高橋 [38], [44], [45] によれば、中世における価格学説の流れを大観してみたとき、その基本的な特徴は、価格は効用と稀少性によって定まるとする、素朴な需給均衡分析であった点に見出すことができ、そして需給均衡価格をそのまま正価として是認する傾向が顕著であったと言えよう。しかし実は、中世の価格論を、このように主観的傾向を有するものとして評価する研究者は意外に少なかったのである。事実、W・ゾンバルト [33] (I, pp. 292—293) やW・アッシュレー [1] (Part II, p. 391) らの見解は、正価の水準は主として生産者の社会的地位をも斟酌したうえでの労働量ないし生産費によって規制されるとみなしたのであった。こうした立場に立つ研究者の多くは、ハインリッヒ・フォン・ランゲンシュタインの述作をサンプルとして中世の正価論を論じているのであるが、実はこの人物は中世スコラ学者の中で典型的な人物でもなければ、またとくに重要な位置を占めるものでもないことが、デ・ルーヴァー [9] (pp. 419—442) によって指摘されている。高橋は自説を実証するために、多数の代表的な中世スコラ思想家の価格論を丹念に検討し、それを要約している。

まずドイツ出身の教父アルベルトス・マグヌス等は、アウグスチヌスの正価論を引き継いだが、正価の水準をむしろ財の生産に要する労働量や費用に求めたように思われる。しかも正価は個人的評価によるものではなく、その社会の一般的な推量によること、そしてそれは労働者の社会的地位、その地位に相当する生活の標準によって見積もられた投下労働量によって定まると論じ、正価の具体的水準に説きおよんだのであった。

しかし彼は常にこのような客観的な正価の基準を堅持したわけではなく、デ・ルーヴァー [9] (p. 422) も指摘するとおり、財の価値は市場の評価に従うべきであるとも記しているから、必ずしも首尾一貫したものとは言い難い (*Opera omnia*, XXIX, p. 638)。

また、アルベルトス・マグヌスの弟子で、中世最大の系統的スコラ学者といわれる聖トマス・アキナスは、当初はアルベルトス・マグヌスと同様に、客観的正価論を標榜していたが、やがて『神学大全』(第2-2部, 第77問題, 第2~3項, 創文社版邦訳・第18巻)では、アウグスチヌスに言及しながら、財の価格はそれに固有なものではなく人間にとっての有用性に依存すると論じ、アリストテレス本来の主観的価値学説への接近を示したのであった。

いま飢饉に苦しむ一地方において小麦を売ろうとする商人がいる。彼はやがて新たな小麦が当地に到着することを知っているのであるが、それを住民に匿して自分の小麦をかなり高価な時価で売却したとする。これは正義に抵触する行為であるや否や。トマス・アキナスの答えは、この行為をも是認するものなのである(『神学大全』第2-2部, 第77問題, 第3~4項)。これを以てしても、ト

マス・アキナスの正価論の本質が市場の需給メカニズムを通じて定まる価格に基づくものであり、いかに客観主義からほど遠いものであるかを知るべきであろう。

こうして価値・価格の決定に際して、主観的要因＝効用を重視するアリストテレス＝聖トマスの伝統は、中世・近世をつうじて近代に至るまで、イタリアの経済思想を灌漑する豊かな水脈となったのである。

14世紀にはいと、時代はもはやチョーサーの『カンタベリー物語』が生み出されるほどの知的成熟を示し、近世の足音が次第に近づいてくるが、たとえばフランスの僧侶ジャン・ピューリドンは、アリストテレスの主観的価値学説を一層深化させ、のちの言葉で言う限界効用逓減の法則を明示的に述べているし、また需要の源泉は単に財から得られる効用だけでなく、さらにその財を購買するための購買力の大きさもまた、与って力のあることを鮮明に悟っていたのであった。また「価値は特定の個人の欲望によって測られるのではなく、交換に従おうとするすべての人々に共通な必要によって測られる」として、「価値のパラドックス」を回避したことにも注意しておこう。

しかし理論的に見て、この時期における最も卓越した見解を述べたのは、フィレンツェの聖アントニーノとシュエナの聖ベルナルディーノであろう。たとえば聖アントニーノは、財の価格は次の三つの要因の相互作用によって決定されると論じた。第一は、当該の財の一般的効用、第二はその稀少性、そして第三は個人をさまざまな程度において快適ならしめる性質、これである。聖ベルナルディーノの場合も同様であるが、ここで重要なことは、彼らが価格の決定要因として、財が人間に与える効用だけでなく、その稀少性をも併せ考えていたという点であろう。彼らは、ある財をつくる困難が大なるほど、その財は稀少性を増し、したがってその価値を増すと論じ、いわゆる「価値のパラドックス」の解決へ、大きな一歩を踏み出したのであった。そして正価の水準の決定についても、もはや客観的尺度は見失われ、「正価論は臆がて需要供給理論となり、競争価格の是認に終る運命を有して居ったのである」（高橋 [47] p. 333）と、高橋は正確に指摘している。たとえば聖アントニーノは

「許容せらるべき利得の高に関しては、確然たる標準を與へ得ざるものである。而も誠實なる人の判断によって之れを決定せしむ可きである」（高橋 [38] p. 416）

と言い、また聖ベルナルディーノは

「公正の価格は、其の場所の評価、即ち売却せらるゝ物體が、斯くの如き時期及び斯くの如き場所に於いて値するものと一般に思惟せられたる所と一致するもの」（高橋 [38] p. 416）

と言って、正価決定の客観的水準を否定したのであった。聖ベルナルディーノと聖アントニーノについてはデ・ルーヴァー [10] に詳細な研究がある。

聖トマスの死後、ただちに生じた反トマス運動の有力人物で「荘厳なる博士」と称せられたガンのアンリィ、英国フランチェスコ教団員で「堅牢不拔の博士」と称せられたリチャードなどはいずれも、価値の要因として主観的な効用を斟酌し、これを是認する点で、同一の系譜に連なる教父として記憶すべき人物であろう。

おそらく唯一の例外をなすものは「明敏なる博士」と称せられ、後期フランチェスコ学派の祖となったゾンス・スコッスおよびその一派であり、彼らは生産費に正常利潤と危険プレミアムを加えた水準に正価を定めようとしたのであった。これに対して、市場メカニズムへの徹底した帰依を標榜するサラマンカ学派からは、手ひどい批判が浴びせられた。ただ、ゾンス・スコッスに関する高橋（たとえば [38] p. 414）の評価は、少々精緻さを欠き、彼の特殊性を他から区別することに失敗している点が遺憾である。

中世の価格論、正価論の基本性格としてその主観的性格を強調し、ゾンバルト＝アシュレーの見解を退ける説は、最近ではデ・ルーヴェー [6]～[10]らによって主唱されているが、高橋はそれよりもはるかに早い時期に正確な考証を積み重ねていたのであった。

需給によって定まる市場価格を正価の規準とする場合、中世の思想家たちはほぼ例外なく、市場が競争状態にあることを前提としている。なんらかの独占力の介在は、次のような理由を以て非難されたのであった。(i) 正当な価格以上に価格が吊りあげられ、それはアリストテレス以来の交換の正義に違背する。(ii) キリスト教の倫理に違背する搾取が生ずる。(iii) 価格の騰貴、供給の減少が一国の富に対して悪影響を及ぼす。——したがって、中世の正価論は、競争の下における市場価格を基準とするものであるとすることができよう。しかし先にも述べたように、聖トマスは飢饉下における小麦の独占的販売を是認するのであるから、彼らの主張を整合的に理解するのは決して容易ではないのである。それゆえ、中世における正価の概念を理解するためには、この時代の競争・独占観の詳細な検討が是非とも望まれるのであるが、遺憾ながら高橋の研究においても、この点の吟味が十分ではない。高橋の研究を補うために、デ・ルーヴェー [6] が役立つであろう。

〔2〕 中世的正価論の社会経済的背景

ここで考えてみなければならぬのは、何故にイタリアを中心とする地域に効用思想が生まれ、長い間にわたって影響力を持続しえたのかという問題である。この点について高橋 [47] (p.332) は一つの明確な解答を提示している。

「都市経済時代、顧客生産時代の静止的価格、慣習的市場価格に於いて其の費用価値学説的表現を看出せる中世的正価論は、臆がて商業の発達に伴ひ、殆んど生産費を知ること能はざる遠隔地方の財貨が、地方市場に供給せらるゝこと漸次多きを加ふると共に、交換をして平等な

らしめ、価格をして公正ならしむる客観的標準を見失ひ、次第に効用価値学説的色彩を濃厚ならしめた。」

約10世紀の頃になると、イタリアのヴェネチア、ジェノア、フィレンツェ、そして北ドイツのハンザ諸都市を中心に、きわめて大規模な遠隔地貿易が始まり、聖トマスの現われる13世紀にはそのピークを迎える。都市の経済は著しい活況を呈し、それはあたかも資本主義と呼ぶにふさわしいほどであったが、そうした繁栄は、18世紀以降イギリスを中心として起こった本来の資本主義とは、本質的な点で区別されなければならない。近世都市経済の最大の特質は、遠隔地貿易の中継点としての役割にある。つまり遠方の産物を安く買っては高く売りという、いわば両面収取による利ざやの獲得を目的とする本質的な商業資本だったのである。あるいはまた、他の階層に金を貸しつける、高利貸的な商人の活躍する場でもあった。いずれにせよ、それは生産を伴うことのない、中継的な商取引を核とする経済であったことが大切な特徴である。このような経済では当然のことながら、生産者間の競争が十分に作用せず、また財の生産費も知り難い状況にあるから、貿易品の価格は生産費よりはむしろ、それに対する需要の高さまたは欲求の強さによって決定的な影響を蒙らねばならない。イタリアを中心とした主観的色彩の濃い価値理論の背景には、このような社会経済的な実情があったことを記憶しておかねばならないであろう。

一方、遠隔地貿易を中心とする都市経済とは本質的に性格を異にする近代的国民経済の発達も、やがて経済思想にも重大な影響をおよぼし始めた。それはかつてのイタリアのように、遠隔地貿易の中継点ではなく、活発な生産活動を伴う経済である。つまり一国に多くの生産者がひしめきながら、しのぎをけずって競争する経済なのである。経済の発達がこの段階を迎えると、生産者間の自由競争をつうじて、財の価格はその生産費に収束する傾向をもち、そしてそのようにして定まる正常な競争価格が望ましくもあるという思想が、自然法思想と結びつきながら大きな広がりを見せてくるのである。たとえば16世紀、17世紀の交わりにおけるオランダには、H・グロチウス、またフランスにはS・フォン・プーフエンドルフらの自然法学者が輩出し、彼らは欲望と稀少性を価値決定の重要な要素とみなしながらも、生産費要因を大きくクローズアップせざるをえなかったのがあった。グロチウスらの生産費重視の傾向はやがて17世紀後半英国におけるウィリアム・ペティの学説へと連なり、さらにはまた「経済学の揺籃」と称せられるR・カンティヨンの学説をも生み出していくことになるのである。高橋の筆はこの間の事情を、次のように鮮明に描き出している。

「斯くの如き間に於いて、国民的工業の発生発達も又、経済思想上に重要な影響を及ぼさなければ已まなかった。経済論は次第に其の中心を、貿易の差額に由って流出入する正貨の高より移して、是れに由って影響せらるゝ国内の産業に置くに至った。重点は流通より生産へ、市場より工業へと移行した。流通の範囲、即ち商取引に於いては、夥多及び稀少は諸物をして

低廉若しくは高価ならしめる。経験的なもの以外に何等客観的な価値の尺度は存せずして、市場の駆引は価格を決定する。生産者間に於ける自由競争が存在することがないか、若しくは然らざる迄も、之れに対する拘束が多たであった時代には、価値を費用の要素に由って決定するは不可能であって、それが効用の要素に由って決定せらるゝことは免れ得ざる所であった。然しながら、生産者間に於ける競争が自由無障と為ると共に、価値は自から生産費に一致せんとするの傾向を有する。斯くてグロシウス (Hugo Grotius) 及びプーフェンドルフ (Samuel von Pufendorf) の徒は、不足及び欲望を以って価値の重要な要素と看做しながらも、生産費の要素を重視しなければならなかった。」(高橋 [47] pp. 333—334。)

ただ、高橋の見解に加えて、ここでもうひとつ注意しておかねばならないことは、学史家のカウダー [18] なども言っているように、主観的な要素を重んずる価値理論が主としてカトリック圏で活発であり、生産費要因、とくに投下労働量を価値の基礎とする思想は、主としてプロテスタント圏の中から生み出されていることである。マックス・ウェーバーが分析してみせたように、宗教改革の中から生まれたプロテスタント、とりわけカルヴァン派の教義は、神の救いが自らにおよぶことを信ずるための自己確証として、現世的な^{ベルフ}職業への献身、つまり「世俗的禁欲」を強調するところに大きな特徴がある。言ってみれば、宗教的な救いの確証をうるために、現世での労働を肯定的にとらえようとする、甚だ現世的色彩の濃い教義なのである。労働価値説はこういう宗教的な環境の中から生まれてくることにも注目しておこう。一方カトリック圏では依然として来世的な宗教思想が支配的であったから、これは容易に倫理的な快楽主義、あるいは経済学上の主観的価値学説に結びつく素質をもっていたと言えよう。宗教が経済思想におよぼした影響を、とくに近世の場合は誇張しすぎてはならないが、資本主義の勃興を精神史 = 内面史的にとらえようとしたマックス・ウェーバーの所説には、経済学史を考えるうえでも、聞くべきところが多いと考える。

§ 3 近世イタリアの効用思想

16世紀にはいると経済思想は次第に宗教と袂を分ち、僧侶にかわって多くの俗人たちが知的活動にたずさわるようになる。そして価値・価格学説は正価論の観点からではなく、とくに貨幣理論の基礎として論ぜられる傾向が強くなったのである。(とくにモンロー [27] を参照。)

この時代のイタリアを代表する最初の経済学者は、G・F・ロッチェーニであるが、しかし、真の意味でイタリア学派の祖となったのは、ロッチェーニよりはむしろフィレンツェのベルナルド・ダヴァンツァーティであったと申さねばなるまい(カウダー [18]、松浦 [26] なども参照)。彼は商業一般にも通じ、また数学も能くし、さらにはタキツスの翻訳者として文運甚だめでたい人物でもあった。

高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史

1588年、時の執政官M・B・ヴァローリの求めに応じ、彼はフィレンツェの学士院で一場の講演を行なったが、それが『貨幣論講義』として残されている。その内容は、国王の貨幣改悪、新大陸よりの貴金属の流入に伴う通貨価値の下落といった経済現象を反映して、財の価値の標準を客観的生産費に求めることなく、きわめて主観的色彩が濃厚なものであった。高橋〔40〕(pp. 245—248)はダヴェンツァーティの数多くの議論を博引傍証して、彼の価値学説の本質を浮き彫りにしている。

「近世初期の経済学説中に在りて価値学説として挙ぐ可きものありとせば、そは悉く労働費説なりと称するを得べし。グロチウス (Grotius) 及びプーフェンドルフ (Pufendorf) の徒は不足及び欲求を以て価値の重要な一要素と看做したるも、然も其の基本価値の観念に至りては結局生産費説に坐するものに外ならず。早く既に第16世紀の交において、独り主観的価値学説を主張せるダヴェンツァチは実に等しく労働価値学説全盛の第17世紀末に於いて確然たる主観的価値説を力説せるモデナの人モンタナリ (Geminiano Montanari) 及び英人バーボン (Nicholas Barbon) の先駆を為せる者とも称し得べし。而して貨幣の供給と其の価値との間の関係に関する理論は又彼れに至りて新生面を呈するに至れるなり。」(高橋〔40〕 pp. 246—247。)

さらにこの価値学説を基礎として、ダヴェンツァーティは、貨幣の品位、量目の悪化がいかに経済に損害を与えるかを説いたのであった(高橋〔40〕 pp. 242—250)。それよりやや時代が下って17世紀、ポーニャの数学・星学教授G・モンタナリもまた、先の高橋の所説にみられるとおり、ダヴェンツァーティの思想を継承したものであるとすることができるであろう(高橋〔40〕 pp. 214—6)。

18世紀に入ると、イタリアの経済学も大いに近代的な内容を兼ね備えるようになり、主観的効用理論を中心としながらも生産費要因を進んで把握しようとする傾向が見えてくる。高橋はその間の事情を次のように正確に把握している。

「近世初期に於ける効用学説こそ却って旧套なる中世的学説の残骸であって、当時の経済的機構の進歩を直視して経験的価値理論を打ち建てんとする者は多く労働費説に赴かんとせるが如くである。」(高橋〔47〕 pp. 328—329)。

この時代のイタリア経済思想史を彩るジェノページ、ベッカリア、デル・ヴェッキオ等の中にあって最も重視しなければならないのは、身の丈四尺半の小法師と称せられる、ナポリの人フェルディナンド・ガリアーニであろう。当然、高橋〔44〕(pp. 1282—1288)、〔47〕(pp. 337—343)はガリアーニの価値・価格論ならびに貨幣論について詳細な記述をとどめている。

ガリアーニは1759年、パリ駐在のナポリ大使館書記官としてパリに赴任し、やがて公使を勤め、パリ社交界の寵児となった才人である。時あたかもルイXV世の治下、ポンパドール夫人をパトロ

ンとする華麗なロココ文化が花開き、その宮廷には、侍医としてF・ケネーも生活していたパリである。そしてガリアーニの交友範囲にケネーをはじめチュルゴー、ディドロなど、数多くの名流が含まれていたことは、イタリアの思想をフランスへ伝え、そしてさらにそれを19世紀以降へとつないでゆく意味で、重要な意義をもっていたと言わねばならない。

彼の最初の著書であり、また彼の代表作とみなされるものは、1750年、ナポリにおいて出版された匿名の著『貨幣論』である。(再版は著者の名を付して1780年に出版。)

この書物を熟読してまず第一に注意されるのは、ガリアーニがG・ヴィーコの影響を濃厚に宿しているという点である。ヴィーコは、歴史を軽視する合理主義に対立する思想のもち主であったが、ガリアーニはその学統を継承して、経済政策の立案にあたっては、その国の歴史的・地理的条件を無視することができないと考えたのであった。この姿勢は甚だ機械的な重農主義思想への批判ともなり、またその時代その場所の流行に影響される価格現象を、主観的にとらえようという立場にもつながるものであった。

ガリアーニの歴史的相対主義の立場を示すひとつの好例を、『貨幣論』第3編「貨幣価値について」から拾っておこう。貨幣の品位の下落と名目価値の引き上げは久しい昔より行なわれていたのであるが、こうした貨幣改鋳に対するガリアーニの見解は、臨機応変の自在さを有するものであった。

ガリアーニによれば、貨幣の改鋳が貨幣価値を下落せしめ、物価を変動せしめるためには幾許かの時間を要する。それは次のような、人間の心理的傾向に起因する。(以下の訳文は手塚〔48〕に負うところが多い。)

「ある食糧品を1ジュカで買うのを習慣としている人々がいたとしよう。これら買手の人々が、いま各々1ジュカを得て、これでいつもの食糧品を買おうとした場合、——ただし彼らの思考は不変とする——食糧品の販売を拒絶したり、価格を吊り上げようとする売手がいれば、買手はこれを非難するであろう。それゆえ、価格の変化は遅いのである。」(『貨幣論』初版, p. 224。)

こうして王または国家は、貨幣の改鋳に対する、民衆の心理的順応の遅いことを利用して、収益を収めることができるのであるが、これは確かにひとつの偽購であろう。しかしガリアーニは、この偽購自体がア・プリオリに悪事であるとは考えない。ガリアーニによれば、このような方法の濫用のみが悪事なのであって、臨機応変なる適用は当然許容されねばならないというのである。

「国家が危急存亡の秋に際会して巨額の経費を必要とし、これを縮減すれば兵士や役人の士気を沮喪せしむるが如き場合には、貨幣の改鋳も正当であり、必要である。」(『貨幣論』p. 239。)

ただし、ガリアーニは貨幣改鋳を「国家の危急存亡の秋」以外に認めるものではない。

「いかに有効な薬でも、これを健全な人にすすめる医者はないであろうし、また罪なきものに刑罰を科そうとする法官もないであろう。」(『貨幣論』 pp. 241—2。)

ガリアーニの歴史的相対主義の立場は、単に貨幣改鋳問題のみならず、後年の著『小麦取引についての対話』(1770)にも現われている。【小麦の自由貿易を主唱する重農学派に対して、ガリアーニは次のように述べて反対する。

「この小さなみずぼらしい小麦の世話までも自然にしてもらってはならない。自然はこんな小さいものの世話までするのはあまりに大きすぎる女である。むしろわれわれはこの自然に、大革命や長い期間の大運動の世話をしてもらおうではないか。政治政策は偶然的原因によって生ずる偶然的一時的運動を予測し、整理することにほかならない。」(『小麦取引についての対話』初版, pp. 236—7。)

そして高橋は、政策の場におけるガリアーニの歴史相対主義を、次のように指摘している。

「抽象的原理は商業政策の安全なる嚮導者ではなく、一定の時若しくは一定の場所に於ける良好なる穀法は、他の時、他の場所においては不良なることある可きを論じて、重農学派の自由貿易論に反対し、後年の歴史学派に等しき態度を示せるものと稱せられている。」(高橋 [44] p. 1288。)

さて次にガリアーニの効用理論をやや詳しくみておこう。

まずガリアーニは、*ダヴァンツァーティ* = *モンタナーリ*と同様、価値は効用と稀少性 (*utilità e rarità*) との合成作用の結果として決まることを認めた。ガリアーニによれば、効用とは財が人間のさまざまな所要を満足せしめる能力であり、また稀少性とは、財の存在量とその使用との間の関係である。空気や水はきわめて有用であるが、稀少性を欠くがために交換価値をもたず、また遠く日本の海岸からもたらされた砂は甚だ稀少であるけれども、いかなる有用性をも欠くがために交換価値を有することがないと論じ、彼は価値のパラドックスを説明したのであった。(『貨幣論』 pp. 58—59。)

こうして効用ないしは欲望が財に交換価値を生じさせる重要な要因であることを理解しながらも、効用がどのようにして価格に転化するのかを説明する議論が、やはりガリアーニにも欠けていたと申さねばなるまい。今日の経済学では効用の最大化から需要函数を導き、需給のバランスする点で価格が決まると教えられているが、ガリアーニには、おそらく限界概念が欠如していたために、この一連のロジックの、最初のハードルを超えることができなかつたのである。価格の決定メカニズムが解明できない限り、費用理論、そして分配理論へと、統一ある理論の展開が不可能であったことも当然である。

他方ガリアーニは、人間の労働によって生産される財の価格は、生産期間中に費される労働者の数等によって決定されるとも論じており、一見労働価値説を採用しているかのように読み取れる。むしろ高橋の言うとおり、この点にこそガリアーニの新しい状況に対応する姿勢が見られるのであろう。

「之れを要するに、ガリアーニの価値論は、伊太利亜社会の経済的機構漸く進み、生産者間に於ける自由競争に対する抑制次第に撤去せられて、貨物の価格は自から其の生産費に適應するの傾向を生じたる時代の産物である。」(高橋 [44] p. 1287.)

労働価値説はすでにジョン・ロックの標榜したところであり、ガリアーニは彼の著作に通暁していたことにも、高橋は注意を喚起している。

最後に貨幣論にまつわるふたつの疑問について記しておこう。

第一は、『貨幣論』初版(1750)は匿名で刊行され、1780年に刊行された第2版に到ってはじめてガリアーニの名が付されていることである。何故に初版本が匿名であったのか、この点を解明する史料は今日のところ何もない。

第二は、『貨幣論』の著者がはたして本当にガリアーニであるかどうかという問題、これである。真著者がガリアーニであることに疑問をもつ論者の根拠は、まず第一に、わずか22,3歳の青年がこのように円熟した経済思想を述べたことに対する素朴な疑問である。そして第二は、ガリアーニが1770年に出版した『小麦取引についての対話』における軽妙活発な文体と比較して『貨幣論』の文体は著しく荘重であり、この二著がとも同一人物によって書かれたとは考えられないという点である。たとえば、J・R・マカロックや、イタリアの歴史家J・ペッキオらがこのような疑点を提出しており、たとえばペッキオは次のように述べている。

「政治の原理に詳しくまた哲学的思索が豊富に顕れているこの書物の如きは長い間の経験をもった人の作物であり得べきであって、弱年のガリアーニの如きが編み得べきものでなかろうと言う人が多い。またこの書物はガリアーニの著書ではなくして、ガリアーニはただ、年配においてもまた判断においても当時既に円熟していた彼のふたりの友人、リヌチーニおよびバルテルミー・インチェリィの説を印刷に付してこの書物となした人に過ぎないと言う人もある。私自身は少しの疑問をさえもっていない。シーザーやポンペーは未だ20歳に達せずして一軍の統帥者となったが、私はよくこの事実を信ずることができる。なぜなら戦争は勇気と若さと常識とをしか必要とせぬからである。またタッソが18歳にしてその詩『ルノー』を作ったのも、ヴォルテールが同じく18歳にして悲劇を書いたのも不思議ではない。想像と詩とは青年につきものである。しかしガリアーニによって書かれたと言われる書物の如く、歴史や人間性について

高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史

の深い観察にみち、政治に対する批評に満ちているものが、21歳の青年によって作り上げられるということはありません、私は信ずる。私にはガリアーニの書物がインスピレーションの作品であるとは思われないのであって、したがって私は、この書物は政治や法律を研究したふたりの人がガリアーニをして書き取らしめたものであらうと信ずる。それのみではない、『貨幣論』はガリアーニの有名なる後の著作『対話』に見られるような軽快な筆致を以て書かれていないで、高尚ではあるが荘重な文体を以て書かれている。』(Histoire de l'économie politique en Italie, pp. 116—118, 手塚 [48] による。)

しかしこれらの根拠はいずれも十分に説得的とは言えない。事実、我が国の最もすぐれた学史研究者のひとりであった手塚寿郎 [48] などは、何よりも前に触れた歴史的相対主義の立場が『貨幣論』および『小麦取引についての対話』の二著をつうじて一貫していることを根拠に、『貨幣論』の真著者はガリアーニであると推断している。いずれにせよ、今日のところでは『貨幣論』をガリアーニの書物だと断定する証拠も充分でなく、また高橋 [47] (p.343) の言うとおりに、「本書をもってガリアーニの真著にあらず、と断すべき確実なる証左」も「未だ発見せられざるもの如くである」。ついでに付言すれば、『小麦取引についての対話』は実はガリアーニをとりまくパリ社交界の貴婦人たちを主たる対象として書かれたものであり、この本が軽妙活発な文体でつづられていたのもむしろ当然のことと言えるであらう。

ともあれ、ガリアーニのフランスにおける影響力がチュルゴー、コンディアックにおよび、やがてレオン・ワルラスの父オーギュスト・ワルラスへと連なる系譜がここに生まれたのである。ワルラスの消費者行動理論は、アリストテレス以来2000年の歴史を有するラテンの効用思想を最も直接的に継承し、これにみごとなフィニッシュを加えたものと評価することができるであらう。このように考えると、イタリアの経済思想をフランスに伝えた通路としてのガリアーニの貢献はきわめて大である。高橋は [47] の第22論文において、チュルゴー並びにコンディアックら18世紀後半のフランス効用思想を詳細に紹介している。(デュボワ [11] をも参照。)

§ 4 英国および独・墺における効用思想

イギリスの経済思想界において、主観的価値学説が明示的に述べられたのは、比較的新しい時代に属することであり、高橋 [40] (pp. 268—270) は、まずその先駆をニコラス・バーボンの『交易論』(1690)に見出している。ペティをはじめとする労働価値説が優勢となりつつあったイギリスで、バーボンはあらゆる財の価格はこれらのものに対する所用もしくは効用と、その稀少性との相対関

係より生ずるものとみた。

ひとたびスミスの『国富論』が世に出てから、とくに19世紀前半におけるイギリスの経済学界は、古典学派の征覇するところであった。しかしこれに批判的な見解も少なからず提出されており、それはあたかも固い地表の下を流れる伏水のごとく19世紀イギリス思想界の一部を灌漑していたのであった。

その最も初期における代表的人物として、高橋 [41], [47] (第26論文) はローダデルを重視している。彼は『公共的富の本質と起源に関する研究』(1804)の中で、素朴な需給均衡分析を試み、労働価値説あるいは生産費説の一面性を鋭くついたのであった。ついでジョン・クレーグ、ジョン・ルークなどローダデルの学統をひきつぐ学者の著作も1820年代の前半に数少ないながら出版せられている。

ローダデルと並んでベンサムは『道徳及び立法の原理』(1780)において、欲望を基礎とする道徳哲学の原理を展開したが、しかしそれを経済分析に適用することなく終わったのであった。(ベンサムについてはブラック [4], ハチソン [16] を見よ。)

ただここでひとつ問題となるのは、18世紀末葉におけるローダデル並びにベンサムあるいはその後裔たちの効用思想がはたしてイタリヤを源とするものであるや否や、これである。イギリスにおける主観的価値学説の発生史は功利主義思想の発生史とともに未だに明確な解答が得られていない学史上の研究課題であり、遺憾ながら高橋もまた、この点については何ら言及するところがなく、

「欲望に関する分析は輒近に至るも猶ほ佛国及び他の大陸学者の手に成れる大多数の経済学上の述作中に看出ざるゝ所であるが、英国学者が斯学に与へたる劃然たる境界は這般の論述を排斥するの傾向があった」(高橋 [36] p. 17。)

と述べるに止まったのである。

この時期のイギリスにおける主観的価値学説の発達を促した大きな要因として高橋 [43] が強調するのは、この国におけるさまざまな社会主義学説の盛行である。

他の諸国に先がけて産業化が進行したイギリスでは、当然のことながら、労使の間に新しい社会的緊張が発生し、それに呼応してさまざまな社会主義思想が生まれた。チャールズ・ホール、ウィリアム・トムプソン、トマス・ホジスキ、フランシス・ブレイ、ジョン・グレイといった思想家の名がすぐに浮かんでくる。彼らに共通する大きな特色は、その思想の基盤をリカードの分配理論に置いていることであり、その意味で、彼らをリカード派社会主義者と呼ぶことが多い。つまり彼らは、生産物はすべて労働の所産でありながら、その多くの部分が労働者には帰属せず、リカードの分配論が明らかにしたメカニズムによって地主や資本家に帰属してゆく——これはいわば不労所得であるから、不正と見なさねばならない、という見解の持主なのである。このような社会

主義思想に対立しようとした人々の中に、相手の基礎となるリカードの理論のアンチテーゼを見出そうとする者が現われたのも自然のなりゆきで、これが反古典派理論の興隆をうながした一因であることも疑いのないところである。

つまり、第一はリカードの労働価値説を打破してそれにとってかわるべき価値学説の樹立を、第二にそれを基礎とした分配理論を再構成しようとする思想界の動きが、次第に主観的価値学説と結合するに至ったのであった。

とりわけ1830年代にはいると、この伝統の中から、さらに素晴らしい業績が生み出されてきた。その中でもまずオックスフォードの経済学教授で、のちに英国^{アソシエーション}教会の大司教の地位についたリチャード・ホウェートリーの『経済学入門』（1831）を挙げねばなるまい。この書物の重要な意義としてまず第一に挙げるべきは、経済学の中心課題を、リカード流のマクロ的分配問題からミクロ的交換理論に転ずる契機となったことであろう。そして第二には、価値理論における主観的要素、つまり効用の果たす役割を重視し、これを理論の中心に据えて、古典学派に対抗したこと、これである。彼は真珠が高価なのは、なにも海女が水にもぐって労働をしたからではない。逆に真珠が高価であるが故に海女は水にもぐるのだ——このようなウィットのきいた議論を展開して、主観的価値学説の立場を明確に標榜していたのであった。

ホウェートリーの後任教授、ウィリアム・F・ロイドは『価値の概念に関する講義』（1833）の中で、より精練された効用理論を展開した。ロイドはあまり表立って数学を使用することはしなかったが、そのシャープな立論をみると、かなり深い数学の修養を積んだ人物であろうと予想される。彼は各財の限界効用をその価格で割った大きさが、すべて等しくなるところで効用の最大化の達せられること、そしてたとえば（マーシャルのように）価値尺度財の限界効用を一定とすれば、限界効用と価格とは正比例することなどを示唆し、のちのマーシャルに迫る分析力を示したのである。

いまひとつ、マウンティフォート・ロングフィールドの著『経済学講義』（1833）では、ロイドよりも完全な形で需給均衡分析が試みられ、さらに限界生産力説さえも予示されていることが、読む者を驚かせる。

こうした反古典学派経済学の伏流は、限界革命直前に到るまで脈々として流れ、それがJ・ベンサム功利主義思想と絡みあいながら、ジェヴォンズへ連なっていることは言うまでもない。たとえば1850年代の後半には、リチャード・ジェニングス、ヘンリー・D・マクラウドといった優れた分析水準を示す学者が生まれていることを記憶にとどめておこう。（ロバートソン [29] を参照。）

高橋 [41] [43] は、限界効用理論を援用してマルクス批判を展開したウィックステッドに到る、この思想の系譜を詳細に検討している。

残された問題点として次の二、三の点を指摘しておこう。第一は、イギリスの効用理論がイタリアの効用思想にいかなる形でつながりをもっているかという点である。第二は、ベンサムの功利主

義の立場がこの時代の効用理論家に与えた影響、これである。ベンサムとジュヴォンズ=ツジウィック=ピグーとの結合関係はすでによく知られたところであるが、彼らに先立つホウェートリー、ロイド、ロングフィールドらとベンサムの思想とは、はたして無縁であったのかどうか、この点もまた高橋の研究においてさえ解答を与えられていない open question なのである。

最後に、ドイツ・オーストリアの思想界に目を転ずることにしよう。まず19世紀末のドイツでは、浪漫主義的・国民主義的思想の系譜の中から、いわゆるドイツ歴史学派が生まれ、とりわけドイツ統一の後に頂点を迎えた後期歴史学派は、G・シュモラーを殿将として、ドイツの経済学界を統帥したかの感があった。

一方、歴史学派に比べるといささか地味な存在ではあったが、19世紀のドイツには、ドイツ古典学派と呼ばれる重厚な理論経済学が、相当の成果を蓄積しつつあったことに注目しなければならない。『国家経済的研究』(1832)の著者、W・フォン・ヘルマン、『国民経済の原理』(1826)の著者、K・H・ラウ、そして時代が大分新しくなってからは『国民経済学綱要』(1863)の著者H・マンゴルトらの名前がすぐに思い浮かぶ。さらに限界生産力説の先駆者フォン・チューネンや、限界効用理論の知られざる先駆者H・ゴッセンもこの系譜に属するものと考えてよからう。

さて、これらのドイツ古典派経済学の流れを通覧してみると、彼らに共通するいくつかの特色を見出すことができる。

第一に、思想面でもまた理論面でもスミス学説への批判的態度を持ち、イギリス古典学派が無視した要因——たとえば効用——の分析に力を注いだことが挙げられる。

高橋〔47〕は特にヘルマンの『国家経済的研究』を採って、詳細な解題を施し、その中で次のような諸点に注意を喚起した。まず、ドイツ古典派経済学の中でも、古い世代に属するヘルマンの場合は、とくにローダデルの影響が顕著であって、彼は個人的利益と公共の福祉とがしばしば撞着することを強調し、公共的な「共同心」の必要を説いたのであった。またヘルマンは労働価値説に反対し(高橋〔47〕pp. 612—614)、価格決定においては主観的要素=効用も無視することのできない要因であると述べ、不十分ながら需要・供給の均衡分析へ近づく考え方を示しているのである。さらにJ・S・ミル流の賃金基金説を公然と否定し、この立場を去った学者としては、おそらくこのヘルマンが最初に挙げられるべきであろうと、高橋はみなしている(高橋〔47〕p. 617)。

マンゴルトの著書は、価値学説としては一層高い完成度を示すものと言わねばならない。マンゴルトは44歳で早逝しているが、これはカンティオンやジュヴォンズの突然の死とともに、経済学史の中でも、まことに口惜しい不幸であった。というのも、彼が残した『国民経済学綱要』はより壮大な著作の一部として書かれたものであるが、この部分だけをとってみても、著者の卓抜した分析力が偲ばれ、もし全プログラムが完成されていたならば、彼はマーシャルと並ぶ名声を獲得したか

もしれないと思像されるからである。実際、価格決定に関するマンゴルトの分析はマーシャルと類似の需給均衡分析であり、それを支える需要曲線は、これまたマーシャルと同様に限界効用曲線から導出され、また供給曲線は費用曲線から導かれるのであった。さらに彼は限界生産力説へ相当の接近を示してもいる。

第二に、効用を斟酌するについては、18世紀のフランス効用思想、とりわけコンディアックらのそれから大きな影響を受けていること、これである。ただしゴッセンについても同様に考えることができるかどうか、これは議論の残るところである。なによりもまずゴッセンは、A・コントの新科学主義に傾倒し、科学的社会改革のプログラムを夢見ていた。結局彼の主義は「最大多数の最大幸福」に帰着し（はたしてゴッセンがベンサム著作を読んでいたかどうかは、学史研究者の間でも見解が分かれている）、彼はこの社会改革プログラムを精密に組み立てるため、効用理論の研究へと進んで、いち早く効用極大化の条件を明確に示したのであった。その際、彼が生まれたラインランドはドイツ最西部に位置し、ここはフランス文化とドイツ文化の交流点になっていたことを考えると、エルベシウスやモーペルチュイといった人々によるフランス快樂主義の思想が、ゴッセンに流れ込んでいたと考えるのが自然ではなからうか。

第三に、主観的要素を重視することについては、高橋 [47] (pp. 606—607) も指摘するとおり、カント哲学の影響を考慮しておく必要がある。カント哲学の特色は、認識対象と認識主体を截然とは区別せず、むしろ悟性の能動的な構成作用を重視するところにある（丸山 [25] 第1章を見よ）。このような認識論の立場からは、経済的価値は人間の評価能力から独立した客体として存在するのではなく、人間の主観的評価を反映して定まるといふ姿勢が、自然と生じてきたのではなからうか。

『国家経済的研究』はヘルマンの唯一の理論的著作であって、彼れは此の書によって独逸経済学に於けるスミス、セイ学派の最も永続的価値ある文献を残した。彼れは独創に富める鋭敏にして且つ周到なる推論家であった。彼れはフォン・チューネン (von Thünen) 及びフォン・マンゴルト (von Mangoldt) と共に、独逸的分析の伝統が歴史学派によって高潮せらるゝに至る以前に於ける其の表明者として傑出するものである。這般の伝統は先づスミスの『国富論』に対するジャン・バチスト・セイの解釈に基礎を有するものであるが、而も、そは又自国の哲学から幾分の影響を与へられなければならなかつた。ヘルマン等の以前に於いて効用理論は其の先蹤によって既に著しく明瞭ならしめられ、発達せしめられて居った。熱心なるカント学徒ゴットリーブ・フッフエラント (Gottlieb Hufeland) は全然カントの『純粹理性批判』の觀察方法を以って進むと共に、主としてセイ及びローダデールの業績に追隨して、純然たる主観的心理学的価値理論を展開した。……(中略)……而して彼れよりも更らに、一切の価値を以って人間精神の活動に基くと做すの意見を強調するものにヨハン・オイゼビオス・ロツツ (Johann

Friedrich Eusebius Lotz)があった。」

この点についてはウィーンの本ゲンの場合も全く同様である(丸山[25]第6章を参照)。本ゲンが説明の対象にしたのは、決して直接的に観察可能な事実(たとえば需要量と価格との関係といった……)ではなく、経済現象の「窮極的かつ一般的原因」=「本質」から複雑な現象の生成される因果的プロセスそのものであった。そしてそのプロセスの理解とは、人間の悟性によってひとつの合理的思惟像を構成することによってはじめて可能になるであろう。この意味で、本ゲンにとっての因果の法則、つまり彼自身の言葉で言うと「精密法則」は、すぐれて先験論的な認識論に立脚するものと言わねばならない。したがって「精密法則」は、「経済」という具体的世界について語っていながら、その真偽は論理的な整合性のみに基づいて判断されるべきであって、経験的なテストによるのではない、と理解されているのである。要するに、それはカントの意味での総合的ア・プリオリに属するものと考えられているのである。

それから第四に、この学派はドイツ官房学(Kameralwissenschaft)の伝統をひく学風を色濃くともどめ、国家の強力な指導力を前提とする政策論への志向が顕著に見られることにも注意しておかねばなるまい。

さて次に「華麗なる没落」と形容されるこの時代のウィーンに目を向け、経済学に視野を絞ってみると、同じドイツ語圏でも、ドイツの経済学とウィーンの本ゲンの経済学とは大分その特徴が違うことに気付く。統一を果たし、新興帝国の実力に十二分の自信を得たドイツでは、国民主義的思想の一発現形態としての歴史学派が、学界に大きな力をふるっていたし、実際の社会経済政策についても相当の発言力を確保していたのであるが、ウィーンの事情は全く異なる。よく知られたとおり、オーストリアは多民族が複雑にいくんでおり、この帝国を支える頼みの綱は、ハプスブルク家への忠誠心、ただそれだけであった。このような構成の国家からは、「国家」という観念は生まれても、「国民」という意識は高揚しにくいであろう。まずこの点本ゲンの学問とベルリンの学問との間に基本的相違をもたらしたひとつの要因ではないか。つまり統一的な国民概念を裏打ちにした経済学ではなく、むしろより一般的・普遍的な学理を追求する性格の本ゲンの経済学が育ちやすい土壌本ゲンにはあったと考えることができるのである。

それからもうひとつ、もっと直接的な要因を考えておいた方がよいかもしれない。つまり本ゲン以前に、ウィーン大学で経済学を講じた人物が誰れ誰れであったか、という点である。シュピーゲル[35](p. 531)はとくにJ・フォン・ゾンネンフェルスの名をあげて彼の影響力を強調しているが、これだけではなお不十分で、ゾンネンフェルス以降の人脈も知る必要がある。本ゲンは『国民経済学原理』の著作によってウィーン大学の講壇に迎えられるのであるが、この若い学者の業績を審査し、適格有能と認めた学者が一体誰れであったか、そしてそれ以前のウィーンの本ゲンの経済学

の学風を丹念に洗ってみる必要があると思うのである。その作業がうまくいけば、ベルリンとウィーンの学問上の相違点が、もっと判然としてくるのではなからうか。

結 語

さて、このあたりでこれまでの議論の要点を整理して、本稿を閉じることにしたい。

価値・価格の決定要因として主観的要因＝効用を重視する思想の流れは遠くギリシャの先哲に源を発し、その後イタリアの地においては、中世・近世をつうじて長い命脈を保ったのであった。このすぐれてイタリア的思想の伝統がガリアーニらを媒介としてフランスの思想界に鼓吹され、チュルゴーやコンディアックなど、顕著な影響力を有する賢者の思索に深い痕跡をとどめた。

ワルラスの効用理論は、この系譜を最も直接的に、自然な形で継承し、それにフィニッシュを加える役割を演じたものと評価することができる。

イタリアからフランスへ流入した効用思想は、とくにコンディアックらの著作を媒介としてさらに細かな分流をつくり、地域特有の哲学や社会思想と干渉しあいながら、さまざまな思想現象を生み出していった。

ドイツ語圏においては、効用思想はイギリス古典学派に対する批判的学統と共鳴し、また一層重要なことであるが、カント哲学と深く結合して、独特の学風が醸成されたのであった。

他方イギリスの効用思想は、むしろ社会主義思想への対抗理論として援用されながら発達した傾向があり、またジェヴォンズ＝エッジワース＝ビグーらの場合、効用思想はベンサム功利主義思想と深い結合関係を有するものであった。ただし、イギリスの効用思想・功利主義思想の流れがイタリアのそれと、いかなる水路を通じて結びついているのか、その点はまだ十分な説明を与えられていない問題と言わねばならないのである。

古代ギリシャに発した効用思想の流れは、休みなく流れて現代の経済理論につらなる。その全貌を描き出す仕事のために、高橋教授の諸研究がもつ大きな意義の一端を本稿が示しえたならば幸いである。

参 考 文 献

- [1] Ashley, W., *An Introduction to English Economic History and Theory*, 4th ed., (Longmans, London), 1920.
- [2] Baldwin, J. W., "The Medieval Theories of the Just Price", *Transactions of the American Philosophical Society*, 49, Part 4 (1959), 1—92.
- [3] Barath, D., "The Just Price and Cost of Production According to St. Thomas Aquinas", *New Scholasticism*, 34(1960), 412—30.

- [4] Black, R. D. C., "Jevons, Bentham and De Morgan", *Economica*, 39 (1972), 119—134.
- [5] Dempsey, B. W., "Just Price in a Functional Economy", *American Economic Review*, 25 (1935), 471—486.
- [6] de Roover, R., "Monopoly Theory prior to Adam Smith: A Revision", *Quarterly Journal of Economics*, 65 (1951), 492—524.
- [7] ———, "Scholastic Economics: Survival and Lasting Influence from the Sixteenth Century to Adam Smith", *Quarterly Journal of Economics*, 69 (1955), 161—190.
- [8] ———, "Joseph A. Schumpeter and Scholastic Economics", *Kyklos*, 10 (1957), 115—143.
- [9] ———, "The Concept of the Just Price: Theory and Economic Policy", *Journal of Economic History*, 18 (1958), 418—434.
- [10] ———, *San Bernardino of Siena and Sant Antonino of Florence: the Two Great Economic Thinkers of the Middle Ages*, No. 19 of the Kress Library of Business and Economics (Harvard Graduate School of Business Administration, Boston) 1967.
- [11] Dubois, A., "Les théories psychologiques de la valeur au 'xviii siècle'", *Revue d'économie politique*, 11 (1897), 849—864, 917—930.
- [12] Finley, M. I., "Aristotle and Economic Analysis", *Past and Present*, 47 (1970), 3—25.
- [13] Gordon, B. J., "Aristotle and the Development of Value Theory", *Quarterly Journal of Economics*, 78 (1964), 115—128.
- [14] ———, *Economic Analysis before Adam Smith*, (Barnes & Nobel, N. Y.), 1975.
- [15] Hollander, S., "On the Interpretation of the Just Price", *Kyklos*, 18 (1965), 615—34.
- [16] Hutchison, T. W., "Bentham as an Economist", *Economic Journal*, 66 (1956), 288—306.
- [17] Johnson, E. A. J., "Just Price in an Unjust World", *International Journal of Ethics*, 48 (1938), 165—181.
- [18] Kauder, E., "Genesis of the Marginal Utility Theory: From Aristotle to the End of the Eighteenth Century", *Economic Journal*, 63 (1953) 638—650.
- [19] ———, *A History of Marginal Utility Theory*, (Princeton University Press, Princeton), 1965.
- [20] 小泉信三『リカアド・研究』(鉄塔書院, 東京), 1929.
- [21] Langholm, O., *Price and Value in the Aristotelian Tradition*, (Columbia University Press, N. Y.), 1979.
- [22] Lewis, T. J., "Anxiety and Acquisition: Aristotle's Case Against the Market", *Canadian Journal of Economics*, 11(1978), 69—90.
- [23] Lowry, S. T., "Aristotle's Mathematical Analysis of Exchange", *History of Political Economy*, 1 (1969), 44—66.
- [24] ———, "Recent Literature on Ancient Greek Economic Thought", *Journal of Economic Literature*, 17 (1979), 65—86.
- [25] 丸山 徹『座談経済学』(サイエンス社, 東京) 1984.
- [26] 松浦 保「イタリアにおけるローザンヌ学派経済学」『三田学会雑誌』61巻9号(1968), 1—22.
- [27] Monroe, A. E., *Monetary Theory before Adam Smith*, (Harvard University Press, Cambridge), 1923.
- [28] ———, *Early Economic Thought*, (Harvard University Press, Cambridge), 1951.
- [29] Robertson, R. M., "Jevons and his Precursors", *Econometrica*, 19 (1951), 229—249.
- [30] 沢崎堅造『キリスト教経済思想史研究』(未来社, 東京), 1965.

高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史

- [31] Schumpeter, J. A., *History of Economic Analysis*, (Oxford University Press, N. Y.), 1954.
- [32] Seligman, E., "On Some Neglected British Economists", *Economic Journal*, 13 (1903), 335—363, 511—535.
- [33] Sombart, W., *Der Moderne Kapitalismus*, Zweite Auflage, (Duncker & Humblot, Munich), 1916.
- [34] H. W. Spiegel, *The Development of Economic Thought*, (Wiley, N. Y.), 1952.
- [35] ———, *The Growth of Economic Thought*, revised and expanded ed., (Duke University Press, Durham), 1983.
- [36] 高橋誠一郎, 「古典的価値学説と効用概念」『三田学会雑誌』19巻2号(1925), 153—177.
- [37] ———, 「アリストテレスの経済学」『社会科学研究』1巻3号, (1927), 1—82.
- [38] ———, 「基督教経済思想」『岩波講座・世界思想』(岩波書店, 東京) 1928.
- [39] ———, 『経済学前史』(改造社, 東京), 1929.
- [40] ———, 『重商主義経済学説研究』(改造社, 東京), 1932.
- [41] ———, 「第十九世紀英国反正統派経済学」『三田学会雑誌』31巻4号, (1937), 501—545.
- [42] ———, 「フィリップ・ヘンリー・ウィックステードの『経済学の常識』」『三田学会雑誌』31巻4号, (1937), 623—656.
- [43] ———, 「第十九世紀前半英国社会主義学説の対抗理論として発達を見たる限界効用学説の先蹤」『三田学会雑誌』33巻3号(1939), 341—375.
- [44] ———, 「効用価値学説史の一節」『三田学会雑誌』33巻10号(1939), 1273—1311.
- [45] ———, 「正価思想史概観」『三田学会雑誌』34巻10号(1940), 2049—2093.
- [46] ———, 「イギリス, プールジュウォジの倫理思想」『岩波講座・倫理学』第6冊(岩波書店, 東京) 1941.
- [47] ———, 『古版西洋経済書解題』(慶應出版社, 東京), 1943.
- [48] 手塚寿郎「ガリアニの Della Moneta に就て」『国民経済雑誌』47巻1号(1929), 96—107.
- [49] Weigand, W., *Der Abbé Galiani*; (Ludwig Röhrscheid, Bonn), 1948.
- [50] Wilson, G. W., "The Economics of the Just Price", *History of Political Economy*, 7 (1975), 56—74.
- [51] Worland, S. T., "Justum pretium: One More Round in an Endless Series" *History of Political Economy*, 9 (1977), 504—521.

(経済学部助教授)